

令和6年度 「学校関係者評価」 結果報告

評価日時：令和7年7月29日火曜日

令和6年度自己評価・自己点検についての、学校関係者評価委員の意見及び学校の改善点・方策

学校関係者評価委員：外部より2名の委員の方に学校関係者評価委員を依頼しました。

今回2回目の開催となります。学校関係者評価委員の方から令和4年度の評価よりの改善点等についてたくさんのご助言を頂きました。

ご指摘いただいた課題については今後改善に取り組みながら、より学校教育が充実できるよう教職員全員でつとめてまいります。

結果

		自己評価・自己点検			学校関係者評価	
カテゴリー		現状と課題	改善策	平均	学校関係者評価委員による主な意見	学校における改善点・方策
I	教育理念 ・ 教育目的	<ul style="list-style-type: none"> 十分行われている。 理念、目的等の明示は出来ているが、学生・生徒への浸透が不足している。 便覧のAP, DPを含み、入学時、進級時には説明を行っている。 卒業までに習得すべき技術項目を明示し授業内容や試験項目を検討している。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育理念、教育目標、教育目的等について説明を行っているが、再度周知させるための方策を検討する。 	3.8	<ul style="list-style-type: none"> 教育理念、教育目標、教育目的等については、学校として目指す役割をわかりやすく明確に示しており、学生・生徒、教員がともに目標達成のために目指す方向性が理解できる。 学校案内パンフレットには、アドミッションポリシー、ディプロマポリシーを掲げ、学校が求める学生像並びに卒業時の到達度が明確に示されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育目標、目的等の浸透に関しては、どういう形で行うのか。日常生活の中で指導していく必要がある。教員の意識を統一しながら指導し、軸がずれないようにすることが必要。 常に、教員が目指す看護師像を学生・生徒へ伝え指導していく。
	II	教育目標				
III	教育課程 経営	<ul style="list-style-type: none"> AP, CP, DPを意識した活動が行えている。 評価体制としてルーブリック評価や、GPAも検討されている。 教員の専門性については、経験がない科目についても講義や実習を担当している。 教員のクリニカルラダーを導入したが、相互研鑽のシステムには至っていない。 研究授業等が行われておらず、教員自らが成長につながる体制ができていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後GPAを取り入れていくにあたり、教員間の理解を深めながら運用の確立を目指す。 教員のクリニカルラダーに関しては一度見直しを行うが、ラダーを活用した研鑽のシステムを構築していく。 研究授業等を取り入れ、教員の成長につなげる。 	3.4	<ul style="list-style-type: none"> 教員のクリニカルラダーについて確認された。このような形式を学生・生徒に活用することができないか？もし活用できれば、学ぶ学生の不足している点や到達できている点が可視化でき自己評価ができると考える。新人看護師を受け入れし就業施設においては、学校での状況が明らかとなるので安心して受け入れることができる。患者に対応するときの人間力を育成するためにも必要になると思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在教員が使用しているクリニカルラダーを学生・生徒用に変更し活用できないかを1年かけて検討していく。学年での到達目標は設定されている為、その点も含め検討していく。
IV	教授・学習・評価 過程	<ul style="list-style-type: none"> 看護技術は、講義、演習を選択し、教員間で共有が図れている。 担当制に変更したことで共有出来ている部分とそうでない 	<ul style="list-style-type: none"> 教育内容マトリックスがないため、マトリックスを作成し見直しを進めていく。 	3.3	<ul style="list-style-type: none"> 授業評価については現在任意となっている。しかし外部講師では約7割、教員は10割の実施教協ということを考えると評価として意識はあると認識してよいと考える。 20数名中数名が意図しない評価結果であったとしても、その 	<ul style="list-style-type: none"> 授業評価に関しては、このまま継続するか、または、全講師への評価を依頼すべきかを今後検討していく。

		<ul style="list-style-type: none"> 部分がみられる。 授業評価は個人に任されている部分があり、卒業生や卒業生を受け入れた施設等からの評価はされていない。 シラバスや各要綱など学習の動機づけとなる資料を活用できている。 	<ul style="list-style-type: none"> 担当制に関しては導入後1年しか経過していないため、今後業務改善等を図りながら評価を行なう。 卒業生や卒業生を受け入れていただいている施設等からの評価がもらえるシステム作りをする。 		<ul style="list-style-type: none"> 結果を基に教員は学生・生徒のとらえ方を認識すべきである。 授業形態については、看護学科では令和6年度より電子教科書へ変更した。これにより検索等が活発にできるようになった。現在高校へ入学する生徒は、小・中学校時代にタブレット等を活用してきた生徒たちである。今後そのような生徒が進学してくる可能性が増えるため、現在の授業では学生・生徒と教員の間にギャップが生じてくる可能性がある。 	
V	経営・管理過程	<ul style="list-style-type: none"> ICTを活用し効果的に行われている。 財政基盤として、コスト削減については教職員全員で取り組むことができている。 予算編成に関しては、少なからず教職員全員に周知できていない。 学生への支援として、さまざまなサポート体制がある。しかしメンタル面での支援が不足している。 自己評価結果についてホームページに公表していたが、職員間に周知ができていなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ICTの活用を推進しているが、コスト削減を含め教育体制に活用できることを、教職員で検討しながら進めていく。 自己評価に関しては、教職員へ周知しながら公表する。 学生支援としてのメンタルサポートについては、チューターを中心とし支援する。 	3.4	<ul style="list-style-type: none"> 医療安全活動については、1回の会議の開催に至った。 コスト削減に関しては、職員全員で取り組んでいると評価できる。しかし、絶対にコスト削減をしてはいけない判断する内容については、現場で学生・生徒に関わっている人たちが守っていかないといけないと思う。経営的にはとても厳しいことは認識できている。 学生・生徒から徴収している施設整備費の内訳について高等学校では現在気象状況も変化してきたことから、生徒一人につき毎月500円のエアコン代を徴収している。学校においても、徴収すべきがいいのか否かを検討してみてもいいのではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> 医療安全管理委員会の開催を定期的に行う。 コスト削減に関しては、内容を吟味しながら進めていく。 施設整備費の内訳について再確認する。内容を吟味し、エアコン代の徴収について検討をしていく。
VI	入学	<ul style="list-style-type: none"> 3つのポリシーを説明する機会が多くなっている。 入学者の選抜は公平に行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> 入学者の募集について、教職員全員で分担して活動する体制をつくる。 	3.5	<ul style="list-style-type: none"> 進路を考えていく中学校への訪問はとても重要となる。また、パパママラーニングサポートシステムもとても良いと思う。コロナ以降、看護師の選択を止める保護者が増えてきたため、看護の魅力を発信するとともに、東九州龍谷高校の衛生看護科と一緒に考えていくことが重要と考える。 現在示されている准看護学科・看護学科のアドミッションポリシー・ディプロマポリシーに関して、表現を変更した方がよい点であったり、過程を変更した方がよいのではないかとと思われる点があるように感じる。その点を一度検討していただきたいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 東九州龍谷高校の衛生看護科のガイダンスで配布される学校案内に、本校の学校パンフレットを入れていただく。 准看護学科・看護学科のアドミッションポリシー・ディプロマポリシーを再吟味する。
VII	卒業・就	<ul style="list-style-type: none"> 卒業時の就職状況と進学状況は共有されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 留学生の受け入れについて、具体的 	3.2	<ul style="list-style-type: none"> 学修成果の評価について、卒業時の卒業生の自己評価と卒業 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートを実施する方向で、今後

	職・進学	<ul style="list-style-type: none"> 基礎看護技術のテストにて取り入れたOSCEを。卒業時の技術到達に関する評価方法として演習を行っている。 卒業後の学生・生徒の追跡調査（評価）までは実施していない。数年おきにも現状把握ができれば、教員の指導の成果、評価につながると思う。 卒業生の看護実践能力の評価を行っていない。卒業後の活動状況を捉える方法が明確でない。 	<ul style="list-style-type: none"> 方法を検討していく。 地域社会とのつながりを持たせるためボランティア活動について検討する。 		<p>生が就職した医療機関での評価が必要と考える。アンケートでもいいので実施してほしい。</p>	検討する。
VIII	地域社会 ・ 国際交流	<ul style="list-style-type: none"> 時間的に制約がある。 教員の研修の機会はいただいている。 自分が行っていないが、研究を行っている学生の発表の機会を設ける。 日常の業務、授業の準備にとどまっている。 教員の研究活動は消極的であり、学校は研究成果を発表する機会として学報を発行していない。 研究倫理審査委員会の設置 	<ul style="list-style-type: none"> 倫理審査委員会の規定は作成したため、その規定の中に「研究」に関する内容を盛り込んでいく。 研究や研修について自主的に計画するシステムや全体で取り組むための枠組みを作っていく。 	2.7	<ul style="list-style-type: none"> 現状、外国人の入学は厳しいと考えるが、今後検討の必要性があると考えます。 卒業後の学生・生徒の追跡調査については、どのようにするか？ 学校として一番把握しやすいのは、同窓会活動がつながりがあるため把握しやすいと考えている。現状を評価することで、教員活動の中に不足していることに気づくことができるし、演習でもっと押さえておくべき必要があるとわかればそれらを教育活動に組み込むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も同窓会とつながりを持ちながら、把握していく。また、県外に就職した学生・生徒に関しては、卒業後のアンケート等を活用することで把握できるよう検討していく。
IX	研究	<ul style="list-style-type: none"> 研究活動に取り組める環境の整備・基盤の不足 	<ul style="list-style-type: none"> 学内の研究に対する倫理規定づくり 	2.4	<ul style="list-style-type: none"> 学生・生徒と教員が同じ講演会を受ける事があるか？ 看護の日などの企画で全員で受講することがある。また、早い時期に企画すれば研修を組み込むことはできる。 医療体制が急速に進む中で、現在の医療を認識するためにも現場の方に講演を依頼するなど環境を整える事でもよいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 年間1回の講演会を企画する。